

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 孫軍悦

孫軍悦氏の博士学位論文「〈誤訳〉のなかの真理—現代中国における日本現代文学翻訳に関する一考察—」は、一九六〇年代、八〇年代、九〇年代という三つの時代に分けて、中華人民共和国における、日本の現代文学の翻訳についての研究である。

孫氏の翻訳分析の第一の独自性は、翻訳されたテキストにおける「誤訳」の問題に着目したところにある。孫氏は「誤訳」の発生した要因を、翻訳者が身を置いている同時代の歴史的状況と結びあわせ、翻訳者自身の中に存在した「無意識的欲望の徴候」の表現として読み解いていった。

結果として、それぞれの時代において、中華人民共和国における、日本に対する社会的な集合意識が、どのように翻訳者の「誤認」や「誤解」や「誤読」を発生させたかを明らかにすることを可能にした。すなわち翻訳分析によって、それぞれの時代の中国社会に対する精神分析的な批評にも、この論文はなっている。

第二の独自性は、それぞれの時代における中国社会の構成のされ方の中で、どのような日本に対する意識や感覚が支配的であったのかを、文学テキストの翻訳の表現の特質から明らかにしたところにある。すなわち中国社会の変容や転換の契機が、どこにあったのかを、文学テキストの表現との相関関係の中で記述することを本論文は実現しているのである。

第一章では、一九六〇年代に翻訳された、安藤更生の『鑑真和上傳之研究』と、これをふまえた井上靖の『天平の薨』の翻訳が分析されている。同時代の日本はもとより、中国の人々も知らなかった鑑真が、当時の中国政府が進めようとしていた、民間の文化交流を通じての日中国交回復の象徴として位置づけられていった経緯が明らかにされていく。

鑑真の物語をとおして、中国と日本の「二千年余にわたる友好の歴史」が存在したかのように中国社会の中で描き出され、これと対立的に戦争による「数十年の不幸の歴史」が対比されていった。この構図が、中国社会における「日本認識」の現在にまでいたる基本的型であることもあわせて明らかにされている。

第二章では、一九八〇年代に集中的に翻訳紹介された松本清張や森村誠一などの、日本の「社会派推理小説」の「推理」という二字熟語についての「誤解」と「誤認」が論じられている。

「推理」という二字熟語が、一方では論理学の専門用語として、他方では伝統的な漢語の用語として二重に解釈されたため、それまでの中国にはなかった、法

論理学というあらたな学問分野を生み出してしまった経緯が明らかにされていくのである。そのことは、慣習ではなく成文化された法律によって社会を統治していこうとする、一九八〇年代の中国の国家的要請とも結びついていたことも論述されている。

さらに、「社会派推理小説」を原作とする映画の、中国語への吹き替えの過程で、意識的な「誤訳」が行われ、法の権威を宣伝しようとする中国国家の意図の下で、「法制文学」という新しい文学概念が生み出されていく過程がきわめて説得的に分析されていく。

第三章では、一九九〇年代の村上春樹の『ノルウェーの森』の翻訳をめぐって、中国社会で発生した大きなブームが分析の対象とされている。翻訳者の林少華の中に刻まれていた中国の文化大革命の記憶をめぐる精神的外傷（トラウマ）と、日本における新左翼の学生運動についての外傷的体験が翻訳の中で複合されていることが明らかにされていく。

そのうえで、「天安門事件」以後の中国社会における読者の意識と感性が、この二つの精神の傷をめぐる文学表現と、どのような相互作用を生み出していったのかが具体的かつ論理的に実証されている。

孫氏の論文に対して、審査委員からは、各章の量的なバランスがとれていないこと、第二章で獲得されている理論的地平が、一章と三章では十分に生かされていないこと、作品の取り上げ方が恣意的であるという印象をぬぐえないという批判が出された。また、各章で論じられた諸問題が、終章でより高次の理論化がなされるまでにはいたっていないという指摘もあった。

しかし、文学テクストの翻訳が、近代における長い戦争の時代を経た後の、中国と日本の関係に対して、中国社会においては、どのような意識化されていない欲望がはたらいていたのかについて、きわめて精緻な分析がなされている本論文は、きわめて優れた到達を示しており、本審査会は、博士（学術）の学位を授与されるにふさわしいものと認定する。